

翻 訳

ホワン・リンス

『ミヘルスとその政治社会学への貢献』(2)

Joan J. Linz “Michels e il suo contributo alla Sociologia politica”  
Introduzione alla nuova edizione italiana di,  
Roberto Michels, *La Sociologia del Partito politico*, 1966.

氏 家 伸 一

目 次

第1章 ミヘルスとその時代

- (1) ミヘルスの生涯と著作 (以上, 第25巻第4号)
- (2) 『政党の社会学』に合流した知的諸潮流
- (3) 『政党の社会学』とドイツ社会民主党

第2章 『政党の社会学』の批判的分析

- (1) 序
- (2) オリガーキーの諸次元
- (3) プロレタリアートの組織と他の組織でのオリガーキー
- (4) 目的の転移: 代替か補完か
- (5) 官僚制化, 中央集権化, オリガーキー
- (6) エリートの補充と周流
- (7) リーダーは誰に対して責任があるか: 有権者か党员か
- (8) リーダー, サブ・リーダー, 活動家, 党员
- (9) 「デ・ユーレ」と「デ・ファクト」のオリガーキー傾向  
(以上, 本号)

第3章 民主主義の諸次元

- (1) リーダーシップ, オリガーキー, 民主主義
- (2) 選挙と責任性

- (3) 応答性
- (4) 有効性
- (5) 「客観的」無効と「主観的」無責任
- (6) イデオロギー的一貫性かプラグマティズムか
- (7) 民主的政治体制内部でのオリガーキー的な政党と組織

#### 第4章 ミヘルスの著作の最近の復活

##### (2) 『政党の社会学』に合流した知的諸潮流

ミヘルスの著作は——他の古典と同様——絶対の真空から生まれ出たのではない。同時代人と直近の先人たちも同じ様な思想を形成し、同種の感情を表明していたからである。彼自身、本書のある脚注や、献辞や、後の著作の中で影響や類似性や知的な親和性を認めていたし、オストロゴルスキー、ブライス、モスカなどの研究者も見解の親和性を認め、酷似した精神と一人の弟子を見つけて喜んでいた。

モスカとの類似性はトリーノのカフェ・フィオーリーノでの出会いから生じた友情からも分かるし、パレルモ出身の学者——1924年版『政党の社会学』と他のいくつかの著作が彼に捧げられた——の著作、『統治および議会政治に関する理論』や『政治学要綱』〔邦訳名『支配する階級』〕への度重なる言及からも分かるし、モスカが本書について書いた書評、そしてミヘルスが数年後にモスカの理論について書いた論文からも分かるのである。マイセルは書いている。

「一つの驚くべきことが起こった。即ち、政治階級の哲学者は、孤立を感じる理由がもはや無いのである。今や彼は十分に自分の弟子と称することの出来る一人の弟子を得たのである。彼は師匠の教えを自分のものとしただけではなく、新しい社会学という脈絡の中にその有効性を模索しようとした一人の注目に値する著述家である。」<sup>(70)</sup> 彼〔マイセル〕は更に、モスカの書評がとりわけある変容を明るみに出していることに注意を喚起している。すなわち、その変容とは、始源の曖昧な段階から発展する組織で実証される変容であり、ミヘルスが研究

した近代の政党の特徴ある側面のことである。

事実モスカは、その書評の中で次のことを強調している。即ち、民主主義の理想の前進（イタリアは少し前から普通選挙を採用し、モスカはそれに反対投票していた）によって性格づけられる時代に、

「イタリアでは、およそ30年前より、騒々しくはないがはっきりと、貴族制とか君主制に好意的ないつもの議論で民主主義に挑戦するのではなく、真の純粋に民主主義的政府の可能性を端的に否定する一学派が確認される、ということである。その学派とは、——新しい造語をお許し願いたい——全く反民主主義というのではなく、非・民主主義であり、それが擁護する原理に従えば、……いかなる政治体制も必然的に、貴族制に、いやむしろ、組織された統治する少数者の、組織されていない統治される多数者に対する支配に帰着する<sup>(71)</sup>というのである。」

本書をたくみに要約した後で彼は、ミヘルスが明るみに出したことが、フランチェスコ修道会が第一世代から第二世代に転換した時代に起こったことや、イスラムのサヌシーヤ派の中に生起したことに類似していることを暴露してみせた。彼は本書の素晴らしい、だが専門的な特色を強調し、的確にこう述べている。

「我らが著者は、社会主義政党の指導者に必要な素質を長々と我々に語る一方で、同じ素質が政党ではなく国家の指揮にとってより適切<sup>(72)</sup>であるのではないか、という問題をほとんど吟味していない。」

様々な政治的少数者の間の差異という問題は、モスカに依れば、別の研究を要する。

「統治する少数者に確認できる様々なタイプの組織についてはもっと綿密な分析が少なからず有益であろう。あるタイプでは権威はいつも上からやって来て、それには一切の制限をつけないのだが、他方では、政治階級が細分化され、その一部が他の権力と拮抗し、社会全体の利益になるような統制を実行することが出来るように構成

されるからである。<sup>(73)</sup>」

こうして書評子は、ミヘルスが外国を考慮に入れながら研究を続けるよう願って、書評を終えている。

ミヘルスの側からは、モスカの全著作を解説した論文で、モスカが社会主義について知っていることには欠陥があること、そしてとりわけ、モスカがいつもソレルとフランス・サンディカリズムを無視してきたことに注意を喚起している。加えてミヘルスは、何故モスカがファシズムに反対であるのかと自問し、それとなく次のように述べたのである。即ち、モスカの立場は自分やパレート（彼の親ファシズムをミヘルスは誇張しており、多分理解していなかった、と我々は考えるのだが）の立場に非常に近いのだが、彼のファシズムに反対する姿勢と、「首相の特権」について下院で行った有名な演説を予見させ得なかった、と。この首尾一貫性の無さについてなされた説明としては、議会制（モスカは国会議員であった）の採用をファシズムが拒否したこと、それに、政府がいかなる公職の交替をも廃止したと宣言して以来、ファシズムが——彼の賞賛する——ブルジョア・インテリを、何の希望も残さずに統治から排除したという事があげられよう。それに反して、モスカの姿勢の決定的な要因として、彼の著作を通してはつきりと分かる合法性への愛着——これは、スチュワート・ヒューズが示したことだが<sup>(75)</sup>——が注目されていない。明白なことだが、この政治的差異は、『政治社会学コース』への序言の中で「私の著作でしばしば着想を促してくれた」と、師匠とパレートに対する賞賛を表明するのを妨げはしなかった。

もう一人の先駆者で『民主主義と政党』——最初は1888年から1889年にかけて一連の論文の形で発表され、1903年に同時に英語とフランス語で本として刊行された——の著者モイセイ・オストロゴルスキーとの関係はもっと複雑である。ミヘルスは『政党の社会学』ではこの本をたったの2回しか引用していない。（一度は政党のオリガーキー傾向の生み出す危険性を回避するために提案された素朴な解決法を批判するためであ

る。)イタリア語版への序言でミヘルスは、オストロゴルスキーのことを忘れていたとの非難に答えて以下のように書いている。

「[オストロゴルスキーは研究をイギリスとアメリカに限ったが]私は、自分が際立たせた傾向を、あらゆる国々の歴史に依拠し、また従って、とりわけ私の個人的な経験が最もよく測量できた国、つまりドイツとフランスとイタリアで証明しようとした。第二に、——そしてこれが重要なのだが——オストロゴルスキーの対象が、とりわけ、民主的政府の機能の分析と歴史に存するからである。即ち彼は、実際、政党の内部政治については数章しか費やしていないし、しかもそれらは、そこで働く力について全く貧弱な考えですら提供するにはほど遠いし、おまけに、扱ったテーマの原因究明の兆候すらほとんど全く見られないのである。第三に、本書の遠近法的性格のある結論は別にしても、繰り返して言うが、私が本書を書き出版した時に、民主的体制の政党研究には多くの面で不可欠なこの本について、私は直接知らなかったからである。」<sup>(76)</sup>

第二のテーマは、——G. ロスが強調したように<sup>(77)</sup>——どの点までミヘルスは、政党がその中で活動する政治システムを蔑ろにしたかを示してくれる。もし鉄則の原因と性質に関する彼の説明を受け入れたとするなら、政治システムの引き起こす相違は実際、全く無視しうるし、『政党の社会学』の結論は、その点にはほんのついでに触れているだけである。

いずれにせよ、ミヘルスの弁明は、全く非の打ちどころが無いわけではない。というのも、アングロ・サクソン、とりわけアメリカの政党の内部構造の研究は、ミヘルスのテーマの研究にとって非常に重要だったからであり、ウエーバーは1905年以来、ブライスを引用して、そのことを明示していたからである。ウエーバー自身<sup>(78)</sup>——彼自身認めているように<sup>(79)</sup>——政党の分析ではオストロゴルスキーに依拠しており、もし『政党の社会学』に先立つ数年間にハイデルベルクの教授とトリノーの教授との間に存在した関係を考慮に入れるなら、後者がオストロゴルスキーと

ライス（一度だけ引用されている）の作品を無視したことは全く奇妙なことに思われる。

マックス・ウェーバーの著作との関係については、J. P. マイヤーが<sup>(80)</sup>、おそらく、このドイツの社会学者が体系的な定式化を発表した年、つまり『経済と社会』と『職業としての政治』の年のみを考慮に入れて、ミヘルスのウェーバーへの影響を推定するという誤りをおかしたということ認めれば充分である。事実、モムゼンが引用した二人の研究者の往復書簡や、なかんずく SPD の投票者の社会構成についてのブランクの論文にウェーバーが付けたすばらしい補注のような、ミヘルスの著作に先立つ他の文章が存在し、それらは逆のことを実証している。1905年に出されたこの補注は政党の真の精確な調査の構想を概説しているのだが、後にミヘルスが発展させ論証した議論の多くを、簡潔に、だが極めて明快に表現しているのである。しかしながらミヘルスは、研究の政治的と道徳的内容による明白な理由のため、次のような示唆を気にとめてはいない。

「アメリカの政党における現象の堅固さ——一般的な政治雰囲気の結果としてそれらの構造に存在する差異のことが頭にうかべられる——は、資料での対照にとって典型的で理念的な限界として考えるべきだし、またそう考えられるのである。」（彼は党での俸祿層 Pfründner つまり党のための仕事で暮らしをたてる人々のグループの増大の帰結に言及している。<sup>(81)</sup>）

書簡にもとづいてモムゼンが示唆し、今しがた引用した補注に基づいてロスが示唆しているように、もしミヘルスが関心を、政治における知識人の役割ないし、投票人の社会的構成の変動と共に党で起きた変化（各々1906年と1907年に論じられたテーマ）から、指導者と追随者の関係や自己目的としての党の観念へと移動させたとするなら、それは明らかにウェーバーの影響のせいである。この最後のテーマは、次の文章でウェーバーが既に論じていた。

「そしてこれらの事どもは、党のすべての恒常的組織に存在する傾向、即ち組織がそのメンバーにとって「目的それ自体」となる傾向へと収斂する。この傾向は例えば、いわゆる修正主義の中に特徴的に表現されている。今では誰でも好きなように解釈している昔の信仰告白から初めは出現した政党を、数百万票を集めることのできる有機体へと変形させる試みの生み出す危険性、党の安全性にかかわる危険性は、党の活動家（語の最も広義の意味で職業的活動家という言葉を用いるが）の隊伍それ自身に大混乱をもたらすほどのものであった。そして全く同じ様に、すべての重要な戦術問題で、党が置かれた具体的状況によって危険にさらされるかも知れない保守的な利害関心がはばをきかすのである。この傾向は社会民主党において一層明白であるように思える。というのも、労働組合も、実際に組織された党の維持に一番関心があるからである。目的それ自体としての党という捉え方は、社会民主党の中でも、既にアメリカでと同じくらい優勢となりつつある。もっとも、社会民主党では、この現象の原因も、そのもたらす帰結も全く異なるのだが。理論的原理をほとんど完全に欠いているのがアメリカの二大政党の特徴であり、そのため労働組合は、自分たちの要求を聞き入れてくれることを約束する党に支持を約束することで、望むものを手に入れることが出来るのだが、一方、ドイツの労働組合は日々警察とのゲリラ戦——これがしかしながら、階級意識の発展には好都合な土壌をなすのだが——に追われ、大政党の長期的な支持を拒むことは出来ないのである。たとえ、党が労働者階級の物質的利益にとって否定的な成果をもたらすことがあっても、そうなのである。実際、他のあらゆる政党は、有力な議会代表をもたず、原理的野党の少数派に留まる労働者の要求をみたすことに全く関心を有しない。しかしながら、党に頼ることで労働組合はどこまで公式の政治的中立性を失い、その結果として、どこまで（もしそれらが堂々と主張するほ

どでは未だないとしたら) 政党の領分での自分たちの勢力を強化できるか、また、どの程度まで、組織された社会民主党——政治的視点からみて活発な政党——は、労働組合の政党になりつつあるのか、もしくはそれになってしまったのか、そして、これは党の内部構造にどのような帰結をもたらし得たか、またもたらし得るか、が考察されねばならない。<sup>(82)</sup>」

SPD で実証された内的変容についてのウェーバーの観念はミヘルスとの文通の論争点であった。1906年の手紙で彼はマンハイムの [党] 大会についてこう書いている。

「私はベーベルとレギエンが少なくとも10回にわたり、「我々の弱い側面」を暗示するのを聞いた。さらに私をうったのは、小ブルジョアジーのような外面的態度、情熱の欠如、それに「左翼」へと通ずる道がふさがれている時、ないしそう思われる時に「右翼」へと道をとる決心ができないこと、これであった。これらの兆候は誰をも恐れさせはしないのだ。<sup>(83)</sup>」

1907年の「社会政策」学会でウェーバーは、「轟きわたるせりふやとげのある批判や悲壮な声でみちた議論と、エネルギーを欠いた長口舌」が、党への信頼から由来する独自のエネルギーに取って替わったことについて語った。ミヘルスがそのことを嘆いたときウェーバーは (1907年11月6日)、彼をひどく驚かせた演説は階級的な心配事をかかえたブルジョアジーの議論として考えるべきなのだ、と回答した。そして皮肉にもこう付け加えている。「君がよく知っているように、私の妻は一つの産業の共同所有者である、たとえそれが小さくとも。誰も知らないけれども。」べつのところで彼は述べていた。

「階級的理念をかかげた階級政党が、語のアメリカ的意味でのマシンよりましなものになりうるなどということは愚かしいことだ。……(そして、こう同僚たちに説いたのである。) 愚か者たちよ、SPD は、議会であれ労組であれ、単純な党のマシンに比べても、(君達

ホワン・リンス『ミヘルスとその政治社会学への貢献』(2)

の視点から見て)「悪くも」、(ミヘルスの視点から見て)「良くも」  
なりようがないのだ。<sup>(84)</sup>

よって、ミヘルスの直近の先達——ソレル(1848年生)、モスカ(1858年生)、ウェーバー(1864年生)——が、民主主義と社会主義に浸った支配的イデオロギーに対する彼の戦いにおいて、彼の理解者となり彼を鼓舞したことは明らかなのである。そして、ミヘルスの真の反対者はマルクスなのであり、だから以下の様に書いているのである。

「経験の示すところによれば、マルクス主義者はたしかに、まことに魅力的なある経済上の教義や歴史・哲学的見解を備えてはいるが、国法や行政法または心理学的領域になると、最も基本的な觀念すらも欠いている。<sup>(85)</sup>」

ボルノグラフィー本の流布を阻止するためのベーベルの提言を論じた後で、彼はこうコメントしている。

「社会主義の問題は、単に、富の公正な、経済的に健全な配分がどの程度に実現できるかという問題に集約される経済の問題であるばかりでなく、また、民主主義の問題でもある。しかも、それは、行政技術的意味とともに心理学的な意味においてもそうなのである。」  
結論として R.ゴルトシャイトを引用している。

「もし社会主義運動が個人の能力の問題を認識と意図の両面から同時に探究しなければ……自分たちの種族がいつその発展のために自由の問題がどのような意味を持つかを十分に理解できない。<sup>(86)</sup>」

心理的側面、権力とその悪用の問題、大衆——とりわけ、労働者階級に属する——がカリスマの呼び掛けに対して敏感なこと、組織とそれがもたらす妨害の重要性、すなわちオリガーキーと独裁の側面を助長する要因を強調したミヘルスは、自由にとって唯一の危険性は経済構造(より正確には資本主義の経済構造)に存するという広く普及していたマルクス主義の考え方の足元をすくうことを企てたのである。バイエルンの革命家クルト・アイスナーは『政党の社会学』出版後ミヘルスの友人に

なり、彼に手紙を書いているが、そこで（本書に言及して）彼に感謝を表明し、アイズナーが一人のマルクス主義者（ミヘルスのこと）から、大衆、組織、指導の現象に関する理解を全く期待されはしないだろうと上品に揶揄している<sup>(87)</sup>。

リップセットはアメリカで最近出版された『政党の社会学』新版への序文の中で、本書が自由を愛するすべての社会主義者にとって有する重要性、そして、共産党系と社会党系の読者に及ぼす影響力、及ぼすにちがいない影響力を強調していた<sup>(88)</sup>。彼が説いていたように、社会主義と労働者の運動はミヘルスを知り、彼を論駁する義務を有するのだが、リップセット個人は、マルクス主義者のシドニー・フック——当時はマルクス主義者であった——とニコライ・ブハーリンの返答を引用している。レーニン後の最も偉大な共産主義理論家であるブハーリンのものを引用してみよう。

「また、ミヘルスが主張しているように、管理者の権力が安定しているとしても、この権力は常に人間ではなく「機械」に関する専門家の権力にとどまるであろう。人間に対してはどのようにして実際に権力を揮うことができよう。ミヘルスは今日まで、行政分野で支配的なすべての地位が経済的搾取の独占的地位の外被以外の何ものでもない、という決定的な事実を無視している。機械を支配する閉鎖的な集団の形成にとって本質的なこの前提条件は、見失われることになった。実際ミヘルスにとって永久の要素、即ち『大衆の無能力』を構成する事柄は見えなくなったのである。それは、実際、あらゆる社会システムの必然的な特性なのではなく、技術と経済の諸条件——これは国民文化と制度レベルに反映するのだが——の産物なのである。未来社会では、エリート of 安定したグループの形成を阻止するような組織者が不断に再生産されるだろうと主張できる<sup>(89)</sup>のである。」

しかし、リップセットが特記しているように、下層階級の状況の将来的

変化に言及するだけでは、ロシアが通過しようとしていた時期(1926年)の説明としては不十分であるし、ましてやブハーリン自身が、その「ページ」の犠牲者となったスターリン時代にとっては一層そうなのだ。にもかかわらず彼はこう続けている。

「過渡期の問題は非常に難しい——私はプロレタリアートの独裁の時代のことを話しているのだが。この時期は労働者階級の勝利を特徴とするのだが、その階級は、しかしながら、全く同質であることはないし、またあり得ないし、勝利の成就と共に、生産力の減退が確認され、その結果大衆は彼らの物的福祉に関しては不安になっている。こういう時期に体制の衰退が生じること、即ち、未来の階級の核になる優勢な社会層が形成されるということは容易に考えられる。しかし、この傾向はそれに対抗する二つの勢力によって阻止し得る。即ち、一つには、実際に生産力が拡大に転ずること、二つには教育の独占が廃止されることである。技術者と組織者が労働者階級自身から大量に供給されるようになる時点から、新しい階級の前提条件は存在しなくなる。最終的な結果は、この傾向の実際の力に懸かるであろう。」<sup>(90)</sup>

ミヘルスの貢献は、まさしく、もし有効に反証されていないとするなら、この「未来の階級の核をなす優勢な社会階層」の形成の起源をなす組織論的で社会的・心理的な、だが経済的ではない前提条件を分析したことに存する。「労働者の階級自身からの技術者と管理者の大量の供給」が問題解決には不十分であることは明らかである。現実の社会主義ソヴェト社会の特徴ある制度や構造の多くはブハーリンが望んだ戦いの最終的成果として生み出されたような類のものである。

もう一人のマルクス主義者ジョルジュ・ルカーチは、<sup>(91)</sup>ミヘルスの本を「非常に興味深い」と見なしながら、当時の政治的知識人らしい特徴あるスタイルで書いている。

「ミヘルスの本は相当の名声を獲得した。それは偶然ではない。こ

の本はマルクス主義とその展望に対するある点で独創的な批判を含んでいるからである。もしミヘルスの社会学的分析が正しいなら、マルクス主義の経済理論にこれ以上かかずらう必要は無いわけである。社会学の公理は、労働者党の発展をブルジョア社会に適応させ、マルクスの革命的な静脈に水を流し込むのに役立つのである。そして SPD の発展は——後に吟味する理由のために——ミヘルスの予後に根拠を与えるように見える。そのため本書が SPD の世界である程度の好評を博するほどである。にも係わらず我々は本書の価値は低いと信ずる。積極的な側面は著者の望む点にはない。彼は政党の一般社会学を提供しようと欲しているのだが、そのかわりに、労働貴族の誕生と成長の影響による帝国主義の時代の SPD における日和見主義の発展を叙述してくれているだけである。しかしこれも記述でしかない。事実ミヘルスはこの問題を提起していないし、歴史的展望を全く欠いているために提起できないのだ。彼は我々に、主に SPD から摘出された事例で、「一般法則」を説明してくれている。しかし彼の学問の方法は（当然彼の知らないうちに）、SPD がそこから発生し、こうして彼の『事例』の多くが説明されうるようなそのような社会的諸力(92)それ自身から由来するのだ。」

紙数の関係で、心理学的解釈——リーダーとそれに従うマスの動機づけ——を基にした考察、こうしてミヘルスが非常に重視した組織論的契機、これらを見捨ててミヘルスの分析を誤解したルカーチの書評をここで詳しく論ずることはできない。しかも彼は、ミヘルスがリーダーの無私と廉潔とを、オリガーキーに抵抗するどころかそれに好都合な契機と考えていることを無視して、ミヘルスに、リーダー間の戦いが彼らのエゴイズムに起因するという命題を押しつけている。彼はこう主張している。

「労働者の運動の分裂や合従連衡の基礎には客観的な動機が存在するという結論に達するためには、社会主義者である必要はない。唯

物論に与していない科学者なら、客観的な動機がそこで表明される「イデオロギー問題」とか「戦術の定式化」にしがみついたままでおるだろうし、それらを引起した階級的動機にまで思い及ばないであろう。<sup>(93)</sup>」

これは、共産主義思想家に対する挑戦となるだろう、というのも、ソ連邦とスターリン主義に於いて実証された変更について、ミヘルスのものとされた心理学的説明にしがみつくのではなく、「階級的動機」を見出そうとしたからである。確かに、もしルカーチがミヘルスの著作をもっと注意深く読んだとしたら、ハンガリー危機の時代に彼にとって現実のものとなったいくつかの仮説を定式化できたであろう。

改良派の雑誌『社会主義月報』は「同志」ミヘルスの作品に対して「労働者の民主主義」<sup>(94)</sup>と題したパウル・キャンプマイヤーの論稿を献じた。そこで著者は本書が提起した最も重要な問題のすべてを認めはしたものの、さほど満足したとは表明していない。まず初めに、党を「リーダーの無い民主主義」というユートピアから救いだしてくれたマルクスに感謝せねばならないだろうと確認され、共同体であれ社会であれいやしくも重要性のあるいかなる仕事でも指導が重要であるという『資本論』の一部と、マルクスがなぞらえたリーダーとオーケストラの指揮者のアナロジーが引用される。続けてキャンプマイヤーは、資本主義の経営者の役割と彼に達成するよう割当られた二つの機能、即ち一つは不可欠なもの——生産の管理——、もう一つは廃絶の運命にあるもの——経済的搾取——なのだが、それらの説明に移る。この脱線によって彼は本書の批判へと進み、それが彼の見るところでは、1891—92年の党の派閥である「エンゲン」の思想を反映しているというのである。かれが言わんとするのは、ミヘルスが党を、それが過去であれ現在であれ、党に関する自分の理想と対照させたというのである。だがこの点については、後で、この最初の SPD 側からの反応を知らない他の批評家たちにもとりあげられた一つの評論を取り上げる時に立ち戻ろう。<sup>(95)</sup>

(3) 『政党の社会学』とドイツ社会民主党 (SPD)

ミヘルスの行った SPD 分析は、それが事実に関するものであれその説明にかんするものであれ、批判を<sup>(96)</sup>あびた。しかし、次のことははっきりさせる必要がある。すなわち、たとえ、それから到達した結論、分析された具体例の研究から定式化された仮説、そしてそこで提起された問題の有効性、それらは証明されたとはいえないとしても、一般的には組織の研究、特殊には労働組合と政党の研究にとってそれらの有効性は損なわれないということ、これである。他方でデュルケムが『自殺論』で、ウェーバーが『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』で使った資料のいくつかについて出された疑問は人間の思想の歴史に対するこれらの著作の重要性を減ずるものではない。同様にミヘルスの著作に関しても、知的関心と発展させられた概念は、研究対象から独立して有効なのである。疑問をもたれたのは、一方で党の初期の——そしてより民主的と想定された——段階、他方でひき続いてなされた組織の発展ないし選挙戦での勝利とともに発生した寡頭制と改良主義の傾向、この両者の対比をする際の慎重さについて、であった。すでにカンプフマイヤーの書評が、これら二つの傾向が初めから党内に存在しているということ<sup>(97)</sup>を強調していた。ミヘルスは、政治に(半)専門的に挺身する人間の数と、党や労働組合——この二つは範疇的に区別すべきなのだが——で雇用された官僚の数が本当に増加したのか、実証しようとはしていないし、それらの数と党員や選挙人やなさるべき職務との間に関係があるのか否かも確認しようとはしていない。実際、党の職務と職員の絶対数の増加は、党で生じた変動について歪んだイメージを与えることになり得るのだ。さらに、組織上の変化と、政治路線ないし政治的スタンスでの変化との関係についてのミヘルスの主張のいくつかは、議会主義と党内決定過程への国会議員の参加とは修正主義的傾向を助長するという論証によって決定的なのだが、それらは実証するのが容易ではない。それどころか、議員の何人かは党の左派に属し、この左派は1912年党務に関する議

員の影響力を削減すること——これは1905年にミヘルスが強く要求したことなのだが<sup>(97)</sup>——に反対したのである。おまけに、中央集権化と改良主義との間にあり得る関係の命題とか、党大会において他より多くの代表を擁した多数派がその有する資金の用途の多くを牛耳るという命題にも疑問が呈されてきたのだ。<sup>(98)</sup>

党員の世論をリーダーがどれだけ本当に代表しているかという問題は絶対に解決し得ないだろうが、ミヘルス自身以下のように認めている。

「ドイツにおいては、党の指導的地位にいる同志が決して大衆との接触を失うことなく、指導者の政策の形式と内容との間には——形式と内容がたがいに矛盾する場合さえも——一部の例外をのぞいては、完全な調和が支配しており、そして、指導者と被指導者との間の理念の共同体は破壊されていず、<党執行部>と、たぶんそれほどではないが党出身の議員も、党員同志の平均的意見を代表している、ということができようであろう。政治という大規模な運動の中でドイツの政治的に組織された労働者がその代表者に寄せる信頼は、また、ある程度、これらの指導者自身の政治的・道徳的信頼性にも<sup>(99)</sup>基づいている。」

近年の研究の証明したところによると、戦争前の状況を USPD（独立社会民主党）の分離時にとられた立場から導き出すこと、即ち、最も過激な潮流に支持を与えていた党のグループは多数派に忠実であったが、他方で穏健な姿勢をとってきたグループは独立社会民主党に加入することになるということから推測しようとしても駄目なのである。とはいえ、ミヘルスの主張に妥当性を全く拒否することは出来ないけれども、やはり、党の内部には明白な表現の自由が存在し、一般党員の世論の顕著な影響力が実在したということ、党のリーダーと官僚の自立化には強い制約が作用していたということ、これは認める必要がある。ただ、戦争の勃発と同時に発生した緊急事態のみが、ミヘルスのとがめた状況のいくつかを生み出すのに寄与したのである。

ギンター・ロスはその浩瀚な研究で、SPD と労組がその中で活動したドイツ帝国の社会的・政治的環境、自由に活動できるかわりの領域を著しく制限する結果しかもたらさなかった環境のことを考慮に入れるのを怠ったと正当にミヘルスを非難している。1915年の英語版でミヘルスがオリガーキーの傾向は、1) 人間本性、2) 政治闘争の本性、3) 組織の本性、<sup>(101)</sup>に由来する、と書いておきながら、続けて、図表による「概要」で様々の規定要因を総括したとき、個人と大衆の心理と組織の技術的必要をとりあげて、「政治闘争の本性」を省略したということは意味深い。他方で、この最後の要因は政治的と社会的の一連の諸力に依存し、その諸力は時と所によって異なり、従って一般化には容易になじまない類のものなのである。よってこの要因は、ともあれ個別研究では第一義的重要性を有すると考えられねばならないが、抽象的で理論的な枠組みからは排除しうることが分かるのである。

ウェーバーは『経済と社会』で「鉄則」をどう考えるか書いているが、それはミヘルスの一般化の傾向とは対照的である。

「たぶん有効な一般化をすることは不可能であろう。政党技術の内のダイナミズムとその具体的場合の経済的・社会的条件とはいかなる状況下でも非常に密接に関連している。<sup>(103)</sup>」

他面、たとえ種々の政治的・社会的体制のオリガーキー的で保守的な傾向（中央派の立場は、どんな代償を払っても組織を守ろうとするために、もしくは、状況にふさわしくない急進的なイデオロギーに与し続けたために、保守的なのである）に十分に光りが当てられていないとはいえ、この「外部的要因」には時折言及がなされている。こうして例えば、フランスの指導者の中の多くの裏切り者は、ブルジョア政治が提供した好機会が豊富に存在することで説明されている。<sup>(104)</sup>一方ドイツにおける権威主義的傾向の優位は、規律に対するドイツ人の自然的性向に加えて、労働者の組織を非合法へと、その結果として秘密性へと押しやった専制的政府に帰着させられている。<sup>(105)</sup>もう一人のエリート権力の著名な研

ホワン・リンス『ミヘルスとその政治社会学への貢献』(2)

究——つまり C. ライト・ミルズの研究——<sup>(106)</sup>もまた、<sup>(107)</sup>ダニエル・ベルによって、アメリカの外交政策で確認された変更が、「階級の内部分裂もしくは論争」よりはむしろ、ロシアの意図（これに合衆国の統制が及ぼし得ないことは明白だ）の解釈によって引き起こされたことを際立たせなかったとして批判されたという事実は興味深い。多少の誇張もあるとはいえ、またミヘルスの著作を唯一心理的要因にのみ還元しているとはいえ、ルカーチは正当にもミヘルスの姿勢を没歴史主義的 a-storicistico とみなした。もっともルカーチは歴史的脈絡を資本主義経済の特定の段階とのみ考え、社会、政治、経済、そして諸制度の複合体とは考えなかったのだが。とりわけ驚かされることは、『政党の社会学』に先立つ著作でミヘルスが、ドイツの労働運動が展開されている独特の脈絡を自分の分析の中で考慮に入れていたこと、しかもウェーバー、そしてドイツ労働運動の研究者ギュンター・ロスの描いた方向からそれることがなかったことである。ロスには、厳密に正統派のマルクス主義に依拠しながらも極左と穏健な改良主義の双方をはねつけ、急進的なイデオロギーを固執しながらも非常に抑制をもって行動した中央派のリーダーたちの政治が唯一可能な道だったのだと、非常に説得力あるやり方で主張している。権威的だけでも幾分かの基本的自由は許容していた体制に反抗できる実際唯一の方法とは、帝国主義への反対の立場を守り続け、同時に、認められた自由を活用し、議会に参加し、強力な組織とあらゆるサブ・カルチャーを構築すること、マルクス主義の経済決定論に由来し、かつあらゆる革命的行動を無用にする勝利を確信して未来を期待すること、これしかなかった。しかるに、理由は異なってもミヘルスやウェーバーを憤慨させたこの政治につきまとう諸矛盾は、戦争の勃発に際して党にきわめて有害となるはずであり、党に分裂をもたらし、党自身がワイマール共和国の与党として有効に活動できるのを妨げることになる。

ロスは当時存在した状況を「消極的統合」と名づけた。それは「本物の議会主義体制への断固たる移行も、労働者の運動の抑圧（このことに

ビスマルクが思い立った時は時既に遅かったのだが)も可能ではない」という事実によって特徴づけられる。「状況に強いられて政府は労働運動に寛容たらざるを得なかった。こうして、発展した階級意識を特徴とする合法的な大衆組織を基礎とする SPD 文化というものが発展し得たのである。」ロスによれば、形成されつつあるこのサブカルチャーは穏健路線と産業での規律を強化するのに寄与した。即ち

「a) 支配体制が労働者に拒否した政治的・社会的認知を彼らにもたらしたこと, b) 出来つつある寛大な雰囲気の中で党と労働組合の合法性に固執しブランキストとアナキストの潮流と戦うことに強い利害関心を抱いたために急進的潮流の影響が減じたこと, c) 運動の拡大とともにますます増加した労働者の相当部分を教育して急進的な政党に加入することと責任ある行動をすることとの間に何等矛盾は存在しないということを自分と他人に証明するために、規律ある行動をし、法定の権威を認め、労働への能力と意欲とを示すようにすること, d) 生存するという唯一のことがらのために生活と労働のよりよい条件を作ることに間接的に寄与し、穏健な改良主義的傾向と産業における平和的關係の確立を促したこと、である。」<sup>(108)</sup>

長々とロスを引用したのは、ミヘルスの心理的と組織論的な分析を、その傾向に特定の外的状況が作用したことを考慮にいれずに、西欧の共産党にみられるある種の傾向に適用する誘惑にとらわれるかも知れない読者を落ち着かせるためである。さらに、社会主義のサブカルチャーと消極的統合の過程についてロスが行った分析は、それらの政党を研究しようとする者にとりわけ興味深いにちがいない。というのもそれは、サブカルチャーと消極的統合とが社会と労働者階級ないし党——特に危機に陥った党 (SPD が帝国の解体時に直面せざるを得なかったような危機) ——に対してもたらした肯定的と否定的の結果というものを浮き彫りにしてくれるからである。

## 第2章 『政党の社会学』の批判的分析

### (1) 序

読者が手にしている一冊の本の主張を要約しようとしてもおろかなことであろうし、その余裕もない。それにもかかわらず、本書の解釈に関して近年現れたいくつかの問題、そしてオリガーキーの概念についてのいくつかの必要な説明に読者の注意を促すことは許されよう。読者にはいくつかの点で我々がミヘルスに対し厳しい批判をしているように見えるかも知れない、という事実のせいとはいえ、我々が本書の重要性と価値を否定していると思われてはならない。ただ、読者がこれを読んで抱くと思われる第一印象、それに引きずられないようにと望むだけである。

モスカはミヘルスを非・民主主義 a-democrazia の理論家と判定している。他の人はさらに進み（彼の後の著作とファシズムに対する彼の姿勢に基づき）、彼を反民主主義と判定した。さらに他の人々は、遂に、ミヘルスが組織の中での民主主義の可能性を認めていると主張するまでになった。以上のことは、二つの仕方で、といっても互いに排除し合わない二つの仕方でも説明できる。先ず本書は民主主義の可能性についていくつかの矛盾、つまり「オリガーキーの鉄則」の最も高飛車な定式化で粉飾されたいくつかの矛盾を含んでいる、もしくは、著者は別の問題に触れているのだ、というものである。我々にとってはっきりしていることは、

「民主主義は、外部からの障害に直面しているばかりではなく、内部的な障害をもかかえており、それらを克服することはある程度までしか望みえないであろう」<sup>(109)</sup>

ということ、そしてそれを証明しようと務めることは、反民主主義であることを意味しないし、民主主義を完全に実施することは不可能であることを証明し同時に民主主義を望ましいものと信ずることは全く可能なのだ。もっとも逆に、それを望まないことも、その可能性を証明するこ

とと全く両立できるのである。この視点からみると、一つの科学的理論は民主主義的とも反民主主義的とも判定できないことになる。科学的理論に関して唯一提出できる問いとは、それが真実であるか否か、それが説明しようとする事実と合致しているか否か、そしてそれが論理的に構成されているか否かという問題なのだ。とりわけミヘルスの理論については、ミヘルスの言うところの民主主義概念は読者の考える民主主義や一般に使われている意味での民主主義と同じなのか、とか、もし違いがあったら、誤解を避けるのに充分なほどにそれが説明されているか、という問題が残るのである。

にもかかわらず、ミヘルスの価値体系という問題つまり彼は民主主義に賛成だったのか否かという問題もまた注目に値する。というのも、彼の意見を知ればどの程度まで彼が誤解されてきたかを理解するうえで助けになるだろうからである。今のところでは、1911年のミヘルスは社会主義と民主主義をなおも理想と見ていたということ、たとえこの理想を実現不可能、もしくは実現しようとしても近似の仕方でのみであると考えていたとしても、そうなのだと言断できる。それを示すのは本書の結論部分その他の多くの節である。しかしながら彼の思想の根底には、社会主義は労働者階級の利害と一致し、労働者階級が人口の大多数を構成するという確信（たとえこの前提は必ずしも常に自明とされているわけではないとしても）に基づいた、民主主義を社会主義と同一視するという危険な考えが存在していた。後になって見られることだが、他の階級や他の多数派が民主的に優位を占めることはありえないと考える漠然とした傾向が存在する。そうすると、このように他の階級とか他の多数派とかが優位に立った場合には、これを許した社会は民主的ではないと結論づけざるを得ないわけである。その結果、観察者——この場合は既にサンディカリズムに傾いた左派社会主義者のロベルト・ミヘルスのことだが——によれば、民主主義を人民の利益に有利なものと定義する傾向が存在する。よってもし人民が多かれ少なかれ積極的に、〔人民の利益と

は]異なる行動方向を支持するなら、この姿勢は民主的ではあり得ず、「オリガーキー」の圧力の結果にちがいないことになる。彼の思想のこの側面は、しばしばインテリの間でみられるのだが、ジョン・D・メイ<sup>(110)</sup>によってミヘルスの「科学的パタナリズム」と呼ばれた。我々としては、各々がある価値——革命、神話、自由、宗教、私有財産、経済的・社会的平等——を民主主義よりも重要と考える自由を有しているということ、だがしかし多数派が自由に行った一つの決定を、それがこれらの価値の一つに抵触するからという理由だけで、民主的ではないと決めつけることは誰にも出来ないということ、このことをはっきりさせておきたい。

ミヘルスは幻滅した民主主義者であり、そのため彼は非・民主主義者である、あるいは反・民主主義者であるといわれてきた。ジョバンニ・サルトーリはいわゆるマキアヴェッリ主義者について書いた所で、こう述べている。

「彼らは、リアリストだから反民主主義者なのか。……私見では、彼らの理論の反民主主義的展開は彼らの仕事ほどリアリスティックではない側面なのであり、むしろ相当に価値観に貫かれた側面なのである。他方でリアリストとしての彼らにとって、何ものにも賛成も反対もしないことは不可能であった。ただ、成功するか否かは別にして、事実の分析に基づいた精確な予報を行おうとする。……

彼らのリアリズムと反民主主義信仰とは切り離して扱う必要がある。彼らはリアリストだから民主主義に反対だったわけではない。リアリズムからは論理的に同一の姿勢が派生するという事はあり得ないことなのだ。」

続けて彼はこう断言している。

「失望は幻想から生まれる。幻滅の底にあるのはリアリズムではなく理想主義なのだ。実際時間的には、理想主義が幻滅に先行するのだ。」<sup>(111)</sup>

しかしもし、反民主主義で反社会主義の姿勢がリアリストの論理的帰

結でないとしたら、心理的帰結ではありうる。幻滅の危険性はシェンペーター、ダール、アロン、リップセット、サルトーリらのような何人かの近年の民主主義に関する理論家を促して、民主主義のより理想主義的な定義を拒み、より現実主義的な定義——これは政治生活への人民の実際の参加を測定するのに役立つとされる——を採用させた。従って、(フランスのタイプの)民主主義の合理主義的観念から(アングロ・サクソンのタイプの)経験的観念への移動が生じたのである。ジョン・D・メイは、ミヘルスの分析の中の矛盾する文章——そこでミヘルスはオリゲーキー的ではない解決の可能性をかいま見せてくれている——をいくつか引用しながら、オリゲーキーへの傾向に対抗する契機を強調し、(エリート)の貴族制に対して(たとえ不完全であっても)民主主義が有する利点を称揚している。こうして彼はミヘルスがもっとリアリストであったら、辛辣だが大胆な見解の多くは避けることが出来たであろうと論証してくれたのである。

ミヘルスは、彼の観察した現象の純粋に心理学的な——今日なら、動機に関する、といえるだろう——説明に限定しないとしたら、社会科学の優れた伝統のうちに属する。彼はこう強調している。

「指導者の独裁は、ただ単なる支配欲求やけしからぬエゴイズムから生まれてくるだけではなく、しばしば、公共の問題に対する自己の価値と貢献についての内心の確信から生じてくる。まさに、義務に忠実な、自分の職業に精通している官僚が、最も独裁的な支配者になるであろう。」

そして、続けて、指導者の誠実さと有能さは障害にはならないという事実に関するW. ハイネの文章を引用している。障害にならないどころか、

「……実はその反対に、幸運にも我々の党にもいるような、自分たちの目的を理解して、無心に全体の利益のために努力する職員が、自己の価値を知っていて、自分が正しく適切と思うことを異論の余地のない規範とみなし、反対の動きを一般利害と推定するもの名

によって追放し、それによって、党の健全な発展に門をとぎすような傾向を、最も強くもっているのである。<sup>(114)</sup>

さらに、一層重要なことだが、ミヘルスの分析はすべて、組織の必要性から生ずる諸要因の重要性を強調する傾きがある。即ちその諸要因とは、組織の成長、すみやかなる決断の必要性、メンバーと連絡することが困難なこと、果たすべき任務の増加と複雑さ、分業、十分に時間をかけて仕事をする必要性、専門的知識の発展、でありこれらは安定した指導部の必要性、その専従化、その卓越さ、そしてルーティンの解決を愛好する傾向を生み出す。これらの諸要因はすべて、安定を求め、もし指導部がその重要性を自覚しているなら、オリガーキーを惹起するのである。ここで強調すべき重要なことは、指導者たちが、動機の結果として自ら受け入れている規律から逸脱しないことである。一定の規律に合致した行動は別種の規律を侵犯することもあり得るという事実はマルクスの時代から社会学者によって明るみに出されてきた。もっともマルクスは個々の企業家の搾取を非難するようなことは断じてなかったのだが。デュルケム自身、個人の責任をプロテスタント的に強調することは、たとえ自殺が同じ宗教規範によれば有罪と断定されているとしても、自殺へと誘う契機であると述べている。マートンはこの問題を次のように表現している。「ある種の社会構造のせいで、ある人たちは社会規範へ同調するよりはむしろ同調しない方へと追いやられる。<sup>(115)</sup>」ミヘルスの研究対象である人々は、基本的に民主的なのだが、組織の必要とか上述の政治的諸要因のせいで、しばしば自らの価値体系に合致しない仕方では振る舞うのである。なるほどミヘルスは繰り返し大衆と指導者の心理的性向に言及してはいるが、この性向は組織の諸要因を強化——場合によっては、弱体化——するという効果を有する。たとえ一見、彼らが単独で行動しているように見えてもそうなのである。ここで我々は読者の注意を興味深い「民主主義政党におけるオリガーキーの病理学の図式」に差し向けた。それを讀むと、ミヘルスが(指導者の)個人心理ないし大衆心理と

組織的諸要因との相互作用をどう考えていたか、それらが指導部の必要性、その安定性、その専断化、そして最後にオリガーキー傾向の発生にどう寄与したかがよく分かる。「図式」でミヘルスは、指導部による党資金と出版の統制、程度の差はあれ特定のグループに益するような選挙戦術、信任票をとりつけるために辞職で脅すこと、その他本書中で描かれたすべての行動のような非合法的活動や大衆に圧力を加える行動のいくつかを全く無視している。彼は民主主義により好都合な条件で組織のメンバーが決定過程に有効かつ活発に参加できるように作用するような要因のみを強調したかったのだと言うことができよう。そしてこれは、社会主義運動に敵対的な批判には関連していないとしても、科学的分析という彼の意図にはそういうものである。

C. W. カッシュネッリ<sup>(116)</sup>のような何人かの批評家は、指導者のもつ自己の価値の意識、権力願望、大衆の側の無関心と感謝の念、大衆の潜在的な服従心、等々の心理学的要因を、技術的・組織的要因に比べると重要性でも興味の面でも劣ると考えている。我々としては、二つの系列の要因の各々の重要性は歴史的環境（ある環境の下ではカリスマ的リーダーシップのための条件が生ずるという事実が示すような）とか、問題のケースが見られる社会とかによって、組織ごとに異なると確信している。何人かの批評家（その中にはブハーリンも入る）が示唆したように、一方では大衆の教育水準の引き上げ、経済的社会的条件の改善、様々な水準での民主的参加の経験などが、比較的豊かな社会の大衆のアパシーや無力感を軽減するのだが、他方組織が一層複雑巨大になる傾向、一層精確になる分業と一層際だってくる専門能力の必要性、最後に、日常生活で組織が一層大きな重要性を帯びてくること、これらは肯定的な影響を相殺するに等しい。そのうえ、低開発社会では心理的要因が、産業化した社会では組織的要因が優勢になるという命題も提起できよう。

(2) オリガーキー（寡頭制）の諸次元

ミヘルスの分析においては、「寡頭制」や「寡頭制への傾向」という言葉が、政党と労働組合の組織内に共通に現れたり、別々に現れたりする、互いに異なる諸現象の全色調を示すために用いられている。以下の諸現象を列挙できる。

- 1) 指導部の形成,
- 2) 専従の指導部の形成,
- 3) 官僚制の形成, 即ち, 特定の業務を行い規則的に給与を支払われる職員の全体,
- 4) 権威の中央集権化,
- 5) 目的の転移, それと, とりわけ最終目的(社会主義社会の達成のような)から道具的目的(組織, これが目的それ自体になる)への変移と新しい目的(労働者階級の改善)の追加。特に革命政党に関しては「保守的傾向」についても語り得る。その結果組織の存続が革命遂行に対してすら優越し, 集団交渉という労働組合の活動や議会活動によって党員の一番直接的な要求を満足させられる行動がますます最重要視されるようになる,
- 6) イデオロギイ的厳格さの強化。即ち, 環境に相応しくなくなってきたイデオロギイと活動方針へ固着し続け, 修正の試みに対しては不寛容になる(この側面についてはミヘルスは看過している)という意味での保守主義,
- 7) 利益と(もしくは)視点に関して指導者と党員との差異が大きくなり, 党員の利益に対して指導者の利益が優越してくること,
- 8) 新しい指導者を現職指導部の中から選ぶこと,
- 9) たとえ望んでも平党員が決定的過程で影響力を及ぼす可能性が縮小すること,
- 10) 党員が構成する基盤から有権者の基盤への転移, 階級的有権者の基盤からもっと広い層の有権者へ転移(いわゆる政党の「オムニバス」化[包括政党化]の傾向)。この転移は, 常にと

わけではないが、穏健な傾向に好都合であり、原理的反対から他党との競合への移行、社会的政治的体制への反対から「誠実」で憲法に忠実な野党へ、そしてあげくの果ては、体制への参加への移行を容易にするのだ。

1)から9)までの特性はおそらくあらゆるタイプの組織で出会えると思うが、最後のものは「民主的競争を基礎とする政治体制」における革命政党とか革命的組織（労働者階級のものとは限らないが）にのみ見いだせるし、たぶん議会制の体制のなかでとりわけ顕著となる。

このリストはこれだけでは、「オリガークーへの傾向」というラベルは何らかの独特の意味を有しないということの証である。ミヘルス批判者はオリガークーの概念を縮減し、——支配階級のような概念を定義する場合のような——もっと正確で実用的な言葉で定義し直そうと試みた。さらに又上記の諸過程のいくつかは、必然的に結合してではなく、個々別々に確かめられるということを実証し結局それらのどれが本当に民主主義と相容れないかを確定しようとも試みた。彼らがミヘルスと一致しない点は、批判者たちが指導部の存在とりわけ専従の指導部の存在は(しばしば、ではあっても)常に民主主義と相容れないわけではないと考えている、ということである。もっとも我々の民主主義としては、直接民主主義という定義は考えていない。この場合に指導部について語ることはさほど意味がないからである。ミヘルスが、「多数者が統治して少数者が統治されるということは自然の秩序に反する」とか、「国民が自らを代表者にゆだねた瞬間から、彼らはもはや自由ではない」という『社会契約論』の主張を肯定的に引用するとき、彼は代表制民主主義の可能性を排除するに至った。さて、上にあげた特徴のリストをざっと見てみると、7)と8)に示した特徴のみがそれ自体で反民主主義であることが分かる。その他の特徴は民主主義とは相容れないが、決してそれが必然であるとは言っていない。それらのいくつか(とりわけ、5)と10)で示されたものは、革命的目的と相容れないことは大いにあり得るが、しかしながら、

民主主義とは矛盾しないし、それどころか、政治的レベルでの民主主義とも矛盾しないことは疑い無い。原理的反対から他党との競合への移行は、国家と組織一般における安定した民主主義の本質的必要条件であるとはっきり言うことができる。

寡頭制の問題は、カッシネーリによって次の様に提起されている。オリガーキーが生ずるのは「組織における執行権力と指導部の行動が他の行動によって制約されない場合、任務を受け持つ人々が下位の任務を受け持つ他の人々の制約を受け付けない場合」である。ロバート・ダールはさらに進んでこう定式化している。

「優越的エリートが存在するという事実は、以下の場合にのみ確認されたといえる。

- a) 仮定の優越的エリートがよく限定されたグループによって構成されていること、
- b) 多くの重要な場合に、非常に大事な政治問題で仮定の優越的エリートの意見がすべての他のグループの意見と異なる場合、
- c) この場合にエリートの意見が常に優越<sup>(118)</sup>であること。」

この最後の定式化は、自らの内部での、また自らだけでの是認と選抜という事実を考察するよりは先ず、意見の相違が存在する場合を考慮に入れることで、統制が存在するか否かを最も容易に確認できるという利点を有する。

ここでの議論の中心問題、即ち民主的指導部とオリガーキー的ないし独裁的指導部（指導者が数人か一人かによる）とをどのようにすれば区別できるかという問題を論ずる前に、我々は一見全くもっともらしく見えるミヘルスの主張を余りに安易に真に受けることのないよう読者に注意を促したい。彼はしばしば正当であり得る、しかし彼が持ち出す証拠は決め手とはならないのだ。さらに我々は、民主主義やオリガーキーという術語を、党や社会や他の種類の組織の内部で、厳密な二分法ではなく、一つの尺度の両極と定義することで、民主主義とオリガーキーの程

度の違いというものを考察する可能性を示唆しておきたい。こうすれば、我々は民主主義を、様々な程度や仕方での指導部の選挙への参加、その決定への影響力、必要な決定を直接行うことと定義できる。

### (3) プロレタリアートの組織と他の組織でのオリガーキー

ミヘルスの研究の出発点は、民主主義の理想の実現を志向した組織にはオリガーキーへの強い傾向が存在するということを実証すれば、あらゆる種類の組織において民主主義が存在することは不可能であることが証明されたことになるという仮説からなっている。そのために彼は研究対象として労働者の組織を選んだ。(それは、当時少なくともドイツでは最も民主主義がしみ込んだ組織であった。)しかしながら彼は、この組織にこそ、なканずく労働組合にこそ、オリガーキーへの傾向を促進するような構造的特徴が存在する可能性、そしてこの傾向がほかならぬこの組織の指導者とメンバーの独特の心理的性向から生ずるという可能性のことを念頭におかなかった。だから、他の社会階級出身の個人が優越するように作られた組織では、そして彼らが民主主義の目標と理想を受け入れた場合には、オリガーキーを規定する要因のいくつかは重要性を失うことになろう。ミヘルスはこの可能性を看取してこう書いている。

「富裕階層の指導者は同じ階層の同僚に対し、貧困の階層の指導者ほどに無制限の力を揮うことができない、……貧困階層は大衆として、自らの指導者に対して全く無力である。」<sup>(119)</sup>

議論は深められていないものの、ミヘルスのうちには、貴族主義もしくはブルジョア的な党や組織は不可避免的に非・民主主義か反民主主義のイデオロギーに染まりきっていると、それらの民主主義への譲歩は全く「倫理的な粉飾」である、即ち必要な票を獲得するためにたまさか譲歩しているに過ぎない、という前提が根強く存在している。もっとも、これらの組織は少数者を代表しているのだから、民主的な内部構造をそのまま保持しているとはいえ、選挙権の拡大や大衆の政治権力への参加に

賛成するわけにはいかなかったのだと反論できよう。結局多数決原理と代表制とは確かにエリートの組織である修道会のうちに史上初めて出現したのである。この点については、指導者の視点からであれ被指導者の視点からであれ、オリガーキーへの傾向を助長する要因のいくつかは労働者階級の組織特有のものであるように見えるということは、ここで強調しておくのが適当と思える。こうして例えば、肉体労働者階級出身の指導者が指導部の地位（これは出世した社会的地位もしくは少なくとも中間層に匹敵した地位を意味する）から工場——ここでは、肉体的職業にむすびついた賃金や社会的威信とか、労働者組織の中で大衆メンバーのアパシーと寡頭制への傾向を生み出す時間の不足、教育不足、そして情報の不足のことを思い浮かべるべきだ——へ復帰することは困難となる。ミヘルスもブハーリンも、時間がたつにつれてこれらの要因はその比重を減ずると考えていた。<sup>(121)</sup>ところで、それらは高い教育水準に恵まれ、高い経済的・社会的地位にある他の階層やグループにも現れはするが、彼らにとってはこれらの要因は労働者階級にとってほどは重要ではないのである。実業家や専門家にとっては、経済的観点からも又威信の点からも、自らの職業に就くことと自らの階級の指導者になることの違いは、労働者の場合ほど大きくはないし、よって前者にとって再選されることは後者にとってほど重大なことではないとも言うる。

ところで、上層階級にもそれなりにオリガーキーへの傾向を助長する独特の要因が存在することは認める必要がある。<sup>(122)</sup>社会で重要な地位にある人が、自分の社会的威信の上昇にさほど貢献せず、政治問題やありふれた政治に首をつっこまざるを得なくなるような職、しばしば選挙で選ばれる職などを引き受けたがらないということは容易に確認できる。もう一つの要因は、自分の仕事にすっかり手をとられた人にみられる傾向、即ち、政治問題を専門の行政官や政治家——彼らは仲間うちでは評判が芳しくなく、自分の職業よりも権力に興味を抱いている——に任せる傾向である。これは従って、しばしば自分が代表する社会集団の最重要な

有資格者でもあるメンバーも共有できない地位を占める、強大な権力を伴った職業的指導部や官僚装置の存在する職業的組織とか、その圧力団体でも確認できる。その結果、公式と非公式の指導部、指導部と経済的権力との間に符合が存在しないことになる。<sup>(124)</sup>

もし、労働者階級の組織に加えて他の組織を考慮に入れるなら、『政党の社会学』で列挙されたオリガーキーへの傾向を規定する要因と過程はこの現象を証明するのにもはや充分ではない。ところがミヘルスが労働者の組織と党に払った注目のせいで、他の階級の組織と政党におけるオリガーキーへの傾向の研究はないがしろにされる結果になった。

だから、平等と民主主義とさらには革命のイデオロギーに基づいて「人民」を志向した組織にこの傾向の存在を証明したということは、すべての組織における「鉄則」の妥当性を証明したことにはならないと結論し得る。

#### (4) 目的の転移：代替か補完か

組織の目的は転移し、組織が目的それ自体となるという命題<sup>(125)</sup>は更なる考察を要する。もし我々が、目的は組織によってしか実現できないという前提を受け入れるとするなら、組織それ自身を維持することは手段でもあり目的でもあるという結論が出る。けだし、組織は最終目的を達成するのに必要だから。従ってこの場合は、最終目的の代替が生じたのではなく、新しい目的の達成と、場合によっては本来の目的の変容が生じたのである。人民が、メンバーの利益を何ひとつ満足させず、ただ自らが目的それ自体となり、ある目的（元々提起された目的ではないとして<sup>(126)</sup>）を達成する手段ではないような自発的な組織を支持するなんてことはありそうもないことである。従って問題は、新しい目的が望ましいものか否かということになる。だが、組織が目指す最終目的を変えたという事実それだけでは、特に元々の目的が達成不可能であることが明らかにされた場合には、組織自身が非・民主主義とか反民主主義であること

の証明にはならない。客観的には又、組織が元々の目的にしがみついているという事実はそれが民主的であることの保証には決してならない。

(5) 官僚制化、中央集権化、オリガーキー

中央集権化や官僚制化や補充の過程についてミヘルスが行ったすばらしい分析と、民主主義かオリガーキーかの問題とは切り離しておく必要がある。<sup>(127)</sup> 実際もしこの過程が有権者の意思の実現を困難にし、責任を負わない指導部を助長するということが本当としても、この帰結は決して不可避ではない。さらにミヘルスはこれらの現象を同一の過程の別の側面と考える傾きを有しているのだが、事実問題としては、それらは、様々の組織にそれぞれに異なった強さで現れ得る別々の現象なのである。独裁ないしオリガーキーがこれらの特徴を示さない事例が存在する。よってこの特徴は本質的ではない。従って、具体的な事例では、部外者や批判的な人物のメンバー認定、職につく資格のある人々にとっての継続性や保障、そして中央集権化した官僚制などが存在しないということも可能なのであり、逆に内部的な争いのため官僚制の拡散が確認できることもあり得る。

(6) エリートと補充と周流

ミヘルスはパレートの「エリートと周流」の理論を自分の研究上の用語で次のように書き換えることが出きると考えている。

「すなわち、それは、支配階級が、たしかに建て前としては権力を保持していても、実際にはまず疲労し、次に崩壊過程に入り、ついには道徳的にも物理的にも壊滅して、新しい政治階級に席をゆずる、という歴史的傾向を示すものである。もちろん実際には、パレートのエリート周流の理論の連鎖のうち、たぶんほんの一部が見られるにすぎない。というのも、その過程は、実際の勢力交代というよりもむしろ新しい勢力と古い勢力との恒常的な融合という形で、生

ずるからである。』<sup>(128)</sup>

政党間の競争，そして党内での指導者や派閥の間の競争の帰結は一つの集団の他の集団による交代ではなく，更新と融合のゆっくりした流れなのである。この点で正確に言いたいのは，歴史上にはこの両種の過程が見いだせるということ，しかしながら，やはり，革命ではなく選挙に基づいた政治体制はミヘルスが提示したモデルに従う傾向をもつというのが本当である。パレートそして彼の前にはトクヴィルが既に認めていたように，古い支配階級が新しい血を同化し，新しい社会階級に政治体制の脚光をあびせる能力はいくつかの場合に（例えばイギリス，ヴェネツィア共和国）政治体制の安定に役だった。

ともあれ，交代過程であれ補充過程であれ指導部の存在を前提にしているのである。よってミヘルスによれば，非・民主的なのである。しかしミヘルスは更に進み，補充過程は確立した体制の擁護者にとってだけ有利な効果をもたらすのであり，そして，権力に新しくついた新人が代表する階級ではなく，その代表それ自身のみがそれから利益を引き出すという命題を提示する。もっとはっきり言えば，彼は補充の過程は腐敗の過程——たとえそれが主観的な視点からではなく，客観的な意味でのみの腐敗だとしても——以外の何ものでもないと示唆している。実際は，彼はある特殊の局面に関してのみ正しい。即ち補充の過程は，もしそれが革命的目的の唐突の浸透として生ずるのでなければ，革命を不可能にするのである。もし，社会的変動としては，革命のもたらす根本的な変動のみを考えるなら，ミヘルスは正しいといえよう。しかしさほどめざましくない変動を取り上げるなら，反対派や批判的分子や少数派の指導部からの補充が新しい路線へと導くだけであるというのは疑いない。従って，人間とおなじ位古い疑問，変化が確認されるためにはどれほどの変化が必要かという疑問にたちもどることになる。指導者はしばしばその被指導者を裏切るものであり，補充の結果生じる唯一の変化が，自分が約束し，実現を望んだ便益を被指導者に確保してやること無しに，権

力とその便益にあずかることでしかないということ、我々はそう認めることができる。妥協——そして補充の過程はいつもある程度妥協を伴うものだが——はいつも曖昧であり、公平を達成し、それに続く協力関係の変化を可能とするためには、双方の当事者が自らの願望や強い野心の幾分かを断念すること、そして、目的とその優先順位を変えることを必要とする。アルバート・ヒルシュマンはそのすばらしい分析の中で、<sup>(129)</sup> どれほど頻繁に、この種の「改良のバーター」が道徳的と知的の非難を受けやすいかを浮き彫りにしてくれたし、ミヘルスも確かに、「権力をめぐる指導者間の争い」の章を書いた時そのような見解をたびたび表明していた。この章には、補充する側の人々の動機と期待についてのすばらしい叙述が存在するが、補充の過程の本格的で独自の分析は存在しない。ミヘルスによれば、補充者たちは、名誉ではあるが実質的権力を伴わない職務でもって簡単に被補充者を満足させることができると考えており、こうして、彼らと被補充者との間の断絶を引き起こすことになる。彼は曖昧ながらこう書いている。

「指導者の集団としておこなわれた行為についての責任は、嘗ての対立者とともに分け持たねばならないのである。<sup>(130)</sup>」

この断定のうちには、古い指導者のみが利益を得、新しい指導者は責任を分け持たされるだけだという想定が含まれている。ここでは、補充された人がその部下のために利益を引き出す目的で行動するとか、その行動が反対派ではなく権力的地位にあることで得られた可能性の推定の結果であり、組織のメンバーの福利によって動機づけられているということは、一考だにされていない。

「組織自体の安定に関する危険性を回避するために新しい分子が、フォーマルであれインフォーマルであれ、組織の指導部とか決定機構に参入するプロセス」として定義される補充の問題は、フィリップ・セルズニックの論考『TVA と民衆：フォーマルな組織の社会学の研究』<sup>(131)</sup>の中心テーマである。その研究で主張されている命題とは、補充の仕組みは

TVA という補充する側の機関に思いもかけない帰結をもたらすということ、そしてこの帰結は、この公社の活動をニュー・ディールが設けた他の公社の活動と比較してみると明瞭になるということ、である。その結論は、補充の研究をミヘルスの到達した地点より先へと追求していく必要性をはっきり指し示している。

(7) 指導者は誰に対して責任を負うか：有権者か党员か

政党の指導者は党员の代表としてかんがえられるべきか、それとも有権者の代表としてか。彼らは自分の活動の報告を党にすべきなのか、それとも有権者にか。党組織は国会に選出された党员を監督すべきである、もっと正確に言えば、閣議はその活動の責任を党に、従って間接的には党员に負うのか、それとも国会に選出された人民の代表に負うのか。ミヘルスは、党における国会の役割は制限されねばならず、指導者は外部の有権者ではなく党の要望に従うべきであると考えていたようであり、党の基盤を選挙に置こうとする傾向は、党を衰弱させる要因の一つであると考えている。他の問題でもそうだが、この問題でもミヘルスは曖昧であり、こう書いている。

「事実場合によっては、未組織であっても社会主義的な思想を持った選挙民の方が、小さな、小市民や法律家によって構成されている党よりも、あるいはまた、その地方に大きな党組織がある場合にも、代表選出のための出席の悪い集会よりも、民主的な意味で、すぐれた基盤となる。<sup>(132)</sup>」

しかしながら、社会主義政党の議会主義的傾向とその結果としての革命的イデオロギーからの逸脱に関する彼の信念は、党内民主主義の問題や、選挙母体〔国民〕のうちに民主主義を実現するための組織としての党の分析からは切り離しておかねばならない。政治の舞台から名士が消え、多かれ少なかれ党から俸給を受け取る国会議員の数が増えるにつれて、この問題は現在、ミヘルスの時代に比べて、非常に大きな重要性を

ホワン・リンス『ミヘルスとその政治社会学への貢献』(2)

<sup>(133)</sup>  
もっている。

逆説的だが、ミヘルスは、まさに選挙人から強い支持を得たために党のオリガーキーの力を免れることに成功した代議士が存在することを知らなかった。もしこれがイデオロギーの視点から不愉快に思われることがないとしたら、この方法を、指導部から独立した党権力の基盤を創り出す仕方として勧告する機会をつかんだことだろう。<sup>(134)</sup>

ロバート・T・マッケンジーはその著『イギリスの政党』の中で、党員大衆による国会議員の完全な統制という理想は実際に達成不可能だけでなく、少なくともイギリスの脈絡の中でも不可能であることを明らかにしている。

「(すべての政党、労働党も認めている) 議会制の慣習は、国会議員に、従って国会の政党にも、その姿勢としては、議会の外での彼らの支持者が形成する組織のことではなく、唯一そして専ら有権者のことを氣にとめるよう命じている。言葉を換えれば、ミヘルスの理論を完全に適用しようとするなら、それはイギリスの政党の中に存在する業務の分業として示し得るものを無視することになる。中でも、政党の組織の中心的役割は、下院において、互いに争い合う指導部を形成することにある。それによって、有権者が選択できるからである。」<sup>(135)</sup>

マッケンジーの定式化<sup>(136)</sup>——ちなみにこれはシュムペーターの民主主義論の枠組みでのミヘルス理論の批判的な見直しへと導くものだが——は、民主主義の理論に解決困難な問題を提示している。もし我々がすべての可能なケースを考察するなら、我々は四つの状況に直面することになる。即ち、1) 党員と指導者と有権者の意見が一致する場合、2) 指導者が党員の願望には敏感だが、有権者のそれには敏感ではない場合、3) 指導者が有権者の願望には敏感だが、党員のそれには敏感ではない場合、4) 指導者が党員の願望にも有権者のそれにも応ずるのを拒否する場合、である。疑いなく、第四の場合がオリガーキーの特徴を示している。しか

し、第二と第三の場合に関しては、どちらがより強くオリガーキーの特徴を示しているのだろうか。党员の数と彼らの意見の強度——多分、利害関係が少ないと推定される有権者の意見に比べれば、より強い——のことを考慮に入れるべきなのだろうか、それとも議員と指導者は有権者の代表としてののみ考えるべきなのだろうか。少数者の意見を押しつける企図としての党組織の要求は、「パルティトクラツィア」の現れ、従って定義上オリガーキーの現れとして拒否すべきなのだろうか。(たとえ、この要求が党内民主主義の規定に則った手続きに従って提案されたとしても。)

これらの問題はミヘルス時代には解決困難な無用の長談義と思われていたかも知れないが、次第にその重要性を増してきた。というのも、現代の調査技術のおかげで(科学者と党の指導者にとって)、いついかなる時でも、党员や党を継続的に支持するつもりの人、そして不確かな選挙人の意見がどうであるかを確認したり、これらの様々な意見の強度を測定したり、党大会や、最重要の決定が下される集まりよりももっと狭いサークルの枠内で行動する下部の指導者の意見の強度を測定することが出来るようになったからである。誰が最終的な指導の責任を負うべきなのだろうか。

党の規律が一般の規範や良心と矛盾しそうな場合に国会議員、議員ではない党の指導者、活動家、党员、選挙人はどう振る舞うか、さらに、代表機関に選出された公務員に対して党が合法的に揮うことの出来る統制についての彼らの見解がどうであるか、今日ではこれらを体系的に研究することが可能になっている。ヘンリー・ヴァーレンとダニエル・キヤッツの研究『ノルウェーの政党』<sup>(137)</sup>、G・サルトーリの研究『イタリアの議会』<sup>(138)</sup>は、様々な政党の代表が自らの役割について考えていることの興味深い資料を含んでいる。合衆国については、立法府の行動に関するウオークと協同執筆者の研究<sup>(139)</sup>、ユーローとスプレーグの研究<sup>(140)</sup>は、国会議員の自己の役割に関する意識調査に従事している。

有権者と下部の指導者の意見を改良主義政党（合衆国の民主党とイギリスの労働党）の下した決定と突き合わせた資料によれば、指導部は大衆よりも保守的になりがちであるというミヘルスの主張を肯定するようには見えない。反対に、より「左派」の立場は、投票人よりも指導者の特性であるように思われる。<sup>(141)</sup>むしろ、突然の経済的、社会的変動に対してもはや支持できない理念を相変わらず擁護するという意味で指導部は保守的である、つまり、——言葉の遊びを許してもらえらるなら——「左派」として保守的である、ということの方がありそうなことである。さらに、地域の指導者と職業的政治家の方がその支持者たちよりも「民主主義のゲームのルール」により忠実であり、市民や反対派の権利を重んずるという事実の証拠もある。<sup>(142)</sup><sup>(143)</sup>

(8) リーダー、サブリーダー、活動家、党员

『政党の社会学』には、様々のレベルでの党活動への参加についての興味深い叙述がみられる。図表で説明されているのだが、分析の途中でサブリーダーの重要性を無視する傾向に気づかされる。<sup>(144)</sup>実際、議論はリーダーと支持者との関係にあてられており、サブリーダーの活動は個人的意見を持たずに高級幹部に従うことに限られていると、暗黙のうちに想定されている。にもかかわらずしばしば、彼らが自らの視点や見解を有することがありうるのだ。実際、彼らが、予め別のリーダーが彼らに示唆したものの新しいリーダー——もしくは、同一のリーダーでも意見を変えた場合——が放棄した理念に忠実であり続けるということは可能である。この場合、サブリーダーが党と組織の原則の「裏切り」について上級幹部を非難するのを妨げるのは困難である。

他方で、社会により統合されているために、党のサブカルチャーへと孤立したり、忠誠の相克をこうむったりすることの少ない党员がリーダーよりも柔軟であることも考えられる。一方サブリーダーと活動家——すべてが党に依存する官僚であるとは限らない——、他方に党

員——活動家よりはアパシーだが、数は多い——と指導者、この双方の間に衝突が起きることもたびたびである。この衝突は近代の政党では解消することは容易ではないし、最終的な解決は、そこで採用された民主主義の概念にかかっている。

(9) 「デ・ユール」と「デ・ファクト」のオリガーキー傾向

実際に見いだされる民主主義の制限と制度的、法律的な制限との区別は正確な境界を提示するものではないが、にもかかわらず無視し得ないものである。自由で開かれた選挙に立ち向かうという危険性——たとえ、敗北が確実なため、誰も彼に対抗できないとしても——を自主的におかそうとするカリスマ・リーダーと、幸運な対抗馬が舞台上に登場するという危険性を生じさせる必要がないように、終身で自らを選ばせるか、自らで任命するようリーダーとを同一の範疇で論ずることはできない。実際のオリガーキーは、「デ・ユール」のオリガーキーとか独裁とは同じものではない。実際、ミヘルス、モスカ、パレートによって巧みに描かれた圧力的手段を用いる必要があるという事実からだけでも、ジョリッティの時代のイタリアのようなオリガーキー民主主義とファシズムの時代のイタリアとは全く別ものであることが分かるのであり、サロモーネの『ジョリッティのイタリア』<sup>(145)</sup>を読んだ者ならよく分かっていることである。このような混乱が、とりわけ後期の著作において、ファシスト党やボルシェビキ党という新しいエリート党の独特のオリガーキーの特徴を明るみに出すことがミヘルスには出来なかったことを説明してくれるし、それらを『政党の社会学』で描かれた普遍的現象それ自身の現れとして考える彼の傾向を説明してくれる。

注

(70) James H. Meisel, *The Myth of the Ruling Class; Gaetano Mosca and the «Élite»*, Ann Arbor, University of Michigan Press, 1958, p. 183.

- (71) G. Mosca, *Partiti e sindacati*, cit., p.27.
- (72) *Ibidem*, p.33.
- (73) *Ibidem*, p.34.
- (74) R. Michels, *Geatano Mosca und seine Staatstheorien*, in 《Schmollers Jahrbuch》, LIII (1929), pp.111-130.
- (75) H. Stuart Hughes, *Consciousness and Society: The Reorientation of European Social Thought (1890-1930)*, New York, Alfred A. Knopf, 1958, pp.270-274. (ヒューズ, 生松敬三・荒川幾男訳『意識と社会』みすず書房, 1965年, 第7章)
- (76) *La sociologia del partito politico*, introduzione alla prima edizione italiana, cit., pp.XX-XXI, nota 34; オストロゴルスキーに関しては次を見よ。Moisel Ostrogorski, *La democratie et les parits politiques*, Paris, Galmann-Levy, 1903. 最近のアメリカでの再版本 (New York, Doubleday Ancor Books, 1964, 2 voll.) には, S. M. リブセットの批判的序文がついている。彼はそこで本書の意義を分析している。
- (77) G. Roth, *op. cit.*, cap. 10: 私は特に次の部分に依拠している。  
*Excursus: R. Michels and M. Weber on Socialist Party Organization*, pp.240-257.
- (78) Max Weber, *Bemerkungen im Anschluss an den vorstehenden Aufsatz*, これはブランクの次の論文へのあとがきである。R. Blank, *Die soziale Zusammensetzung der sozialdemokratischen Wählerschaft Deutschlands*, in 《Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik》, XX (1905), pp.550-553.
- (79) Max Weber, *Politik als Beruf*, cit.
- (80) J. P. Mayer, *Max Weber and German Politics*, London, Faber and Faber, 1956, pp.81-83.
- (81) M. Weber, *Bemerkungen...*, cit., p.551.
- (82) *ibidem.*, p.552. (イタリックは引用者)
- (83) W. Mommsen, *op. cit.*, pp. 122-123; 次も見よ。 *Dikussionsrede bei den Verhandlungen des Vereins für Sozialpolitik in Magdeburg, 1907, über Verwaltungsorganisation der Städte*, in *Gesammelte Aufsätze*, cit., pp.407-412. ここでは, 地方行政への社会主義者の参画の意義が分析され, それは既存の政治的, 社会的秩序に何の損害も及ぼすことはあり得ないし, むしろ, 党内で既に生じている変化を促進する結果になった, と主張されている。
- (84) W. J. Mommsen, *op. cit.*, ivi.
- (85) *La sociologia del partito politico*, p.514 (邦訳, 435頁)

- (86) *Ibidem*, pp. 514-515. (同上, 436頁)
- (87) R. Michels, *Kurt Eisner.*, p.385.
- (88) Seymour Martin Lipset, *Introduction a R. Michels, Political Parties: A Sociological Study of Oligarchical Tendency of Modern Democracy*, New York, Collier Books, 1962, pp.15-39, ivi pp.20-21. ミヘルスの著作に対する優れた批判的序論である。
- (89) Nicolai Bukharin, *Historical Materialism: A System of Sociology*, New York, International Publishers, 1925, pp.309-310. アントーニオ・グラムシもミヘルスの著作(なかなづく後期の著作)について長々と論じた。cfr. *Roberto Michels e i partiti politici*, in *Note sul Machiavelli, la politica e lo Stato moderno*, Torino, Einaudi, 1949, pp.95-100.
- (90) *Ibidem*, p.311.
- (91) 『政党の社会学』へのルカーチの書評は次にある。《Archiv für die Geschichte des Sozialismus und der Arbeiterbewegung》, XIII(1928), pp.309-315; 次も見よ。Georg Lucács, *Zerstörung der Vernunft*, Berlin, Aufbauverlag, 1955, (ルカーチ『理性の破壊』『ルカーチ著作集』12, 13, 白水社, 暉峻凌三, 飯島宗亨, 生松敬三訳, 1968年)
- (92) 引用文は前注(91)の書評 p.309 にある。ミヘルスの応答は次にある。R. Michels, *Kurt Eisner*, cit., p.312.
- (93) G.Lucács, recensione, cit., p.312.
- (94) Paul Kampfmeier, *Arbeiterdemokratie*, in 《Sozialistische Monatshefte》(1911), pp.1180-1186.
- (95) 35才になったばかりの著者の書いた本書は、以下のような著名人による好意的な書評を招いた。講談社会主義者のグスターフ・ショモラー, 重要な政治家フリードリヒ・ナウマン, ベニグセンとラサールの伝記を書いたヘルマン・オンケン, ベルギーの最重要な社会主義者 Daniel Warnotte, アメリカ社会学の創始者の一人アービン・W・スモール, アキッレ・ロリーア, 将来のチェコスロヴァキアの指導者トーマス・マサリク, そして社会主義系労働組合とキリスト教系労働組合の多くの指導者たちである。(書評の完全なリストはイタリア語訳の第一版とドイツ語の第二版への序文でミヘルス自身が作っている。) アービン・スモールの示した熱狂ぶりは書評子の中でも決して例外的ではない。彼は《American Journal of Sociology》XVII(1911), pp.408-409 にこう書いた。「本書は真面目な社会心理学徒なら誰も無視できないもののひとつである。その内容を承認しようとしまいと, 本書を吟味し, そこでなされたすべての分析の信憑性を検証するという作業を怠ることはできない。……本書は新しい分析の分野を開拓したのだろうか。(オストロゴルスキーとラッシェンホファーとの類似性を

指摘した後での自問私は自信をもって肯定する。」半年もたないうちに本書はイタリア語、フランス語(ル・ボンの編んだ叢書の一冊として)、英語そして日本語(日本の自由主義運動をよく見通していた人物の一人、後藤卿の序文付き)に翻訳された。

- (96) とりわけ次を見よ。Gerhard A. Ritter, *Die Arbeiterbewegung im Wilhelmschen Reich: Die Sozialdemokratische Partei und die Freie Gewerkschaften (1890-1900)*, Berlin-Dahlem, Colloquim Verlag, 1959. ないし, T. Nipperdey, *op. cit.*, 後者はミヘルスについて長々と論じている。本書と、同じテーマを扱った他の著作は、党の地方組織と、地方と国家レベルでのその活動とに関するもっと多くの専門的研究の必要性を強調している。ここで、SPDと労働組織についての詳細で批判的な文献目録を提出することはできない。よって読者には、Carl E. Schorske, *German Social Democracy (1905-1917): The Development of the Great Schism*, Cambridge, Mass., Harvard University Press, 1955, pp.331-352の文献紹介——これは第一次資料と第二次資料の双方に触れている——にあたるようお勧めする。もう一つの文献目録としてはG. Ritter, *op. cit.*にもある。Peter Gay, *The Dilemma of Democratic Socialism: Edward Bernstein's Challenge to Marx*, New York, Collier Books, 1962, (ピーター・ゲイ, 長尾克子訳『ベルンシュタイン——民主的社会主義のディレンマ』木鐸社, 1980年)も見よ。SPDの党内政治に触れた文献の大部分はワイマール共和国の崩壊の原因をめぐる議論と関連しているし、しばしば、第一次世界大戦が終わると党が根本的な社会革命をもたらすよりは純然たる政治革命へと自己限定したという事実で失望した人々の手になるものである。Roth, *op. cit.* はこういう視点から既存の文献を考察している。《World Politics》, XI(1959), pp.629-651の、ショルスケ、ベルラウ、ピーター・ゲイの著作のクラウス・エプシュタインによる書評を見よ。

(97) T. Nipperdey, *op. cit.*, pp.353-354.

(98) *Ibidem.* p.352.

(99) *La sociologia del partito politico*, p.158. (邦訳, 119頁)

(100) G. Roth, *op. cit.*, *passim*.

(101) 次でも言及されている。R. Michels, *Political Parties*, New York, Collier Books, 1962, pp.5-7.

(102) *La sociologia del partito politico*, p.524. (邦訳, 439頁)

(103) Max Weber, *Wirtschaft und Gesellschaft*, Tübingen, J. C. B. Mohr, 1956, vol. II, pp.678.

(104) *La sociologia del partito politico*, p.145. (邦訳, 107頁)

(105) *ibidem.* p.145. (同上)

- (106) C. Wright Mills, *L'élite del potere*, Milano, Feltrinelli, 1959. (C. W. ミルズ, 鶴飼信成・綿貫謙治訳『パワー・エリート』(上, 下), 東京大学出版会, 1969年)
- (107) Daniel Bell, *Is there a Ruling Class in America? The Power Elite Reconsidered*, in *The End of Ideology*, Glencoe, Ill., Free Press, 1960. cap. 3, ivi pp.64-67. (ダニエル・ベル, 岡田直之訳『イデオロギーの終焉』東京創元新社, 1969年, 第三章)
- (108) G. Roth, *op. cit.*, passim. とりわけ結論 pp.315-316 を見よ。
- (109) *La sociologia del partito politico*, p.7. (邦訳, VI頁)
- (110) John D. May. *Democracy, Organization, Michels*, in 《American Political Science Review》, LIX(1965), pp.417-429. (筆者が本稿のことを知ったのが余りに遅かったため, そこで述べられた興味深い思索にこれ以上の関心を払うことは出来なかった。)
- (111) Giovanni Sartori, *Democratic Theory*, New York, Praeger, 1965, pp.40-43. 本書のイタリア語版 (*Democrazia e definizioni*, Bologna, Il Mulino, 1958) では, このくだりで総括的に述べられた考察は, III (「リアリズムの問題」) で展開されている。
- (112) Joseph A. Schumpeter, *Capitalismo, socialismo e democrazia*, Milano, Comunità, 1954 (初版は1942年である), 第4部なかんずく第21章と第22章; Robert Dahl, *Preface to Democratic Theory*, Chicago, University of Chicago Press, 1956; Raymond Aron, *Sociologie des sociétés industrielles esquisse d'une théorie des régimes politiques*, Paris, Centre de Documentation Universitaire, les Cours de Sorbonne, 1958; Seymour M. Lipset, *L'uomo e la politica*, Milano, Comunità, 1963. (S. M. リプセット, 内山秀夫訳『政治の中の人間』東京創元社, 1972年)
- (113) G. Sartori, *op. cit.*, pp.43-44.
- (114) *La sociologia del partito politico*, pp.310-311. (邦訳, 254頁)
- (115) Robert K. Merton, *Social Theory and Social Structure*, Glencoe, Ill., 1957 (イタリア語訳は Bologna, Il Mulino), 第4章「社会構造とアノミー」
- (116) C. W. Cassinelli, *The Law of Oligarchy*, in 《American Political Science Review》, XLVII(1953), pp.773-784. 本論文は, 最近出版された『政党の社会学』英語版の S. M. リプセットの序文, 最新のドイツ語版へのウェルナー・コンツェの序文, そして J. D. メイと G. サルトーリの論考と並んで本書の最重要な批判的分析である。
- (117) *La sociologia del partito politico*, pp.510-522. (邦訳, 443, 148頁)
- (118) Robert Dahl, *A Critique of the Ruling Elite Model*, in 《American

- Political Science Review》, LII(1958), pp.463-469; 次に再録されている。Sociology: The Progress of a Decade, cit., pp.433-438.
- (119) *La sociologia del partito politico*, p.40. (邦訳, 15-16頁)
- (120) *Ibidem.* p.531. (邦訳, 450頁)
- (121) S. M. Lipset, *L'uomo e la politica*, cit., cap. IV. (リブセット, 邦訳, 第4章)
- (122) N. Bukharin, *Historical Materialism*, cit., pp.310-311; *La sociologia del partito politico*, pp.530-531. (邦訳, 450頁)
- (123) 次を見よ。Oliver Garceau, *The Political Life of American Medical Association*, Cambridge, Mass., Harvard University Press, 1941, pp. 25-49, passim; Harry Eckstein, *Pressure Group Politics, The Case of the British Medical Association*, London, George Allen & Unwin, Ltd., 1960, pp.71-72, 93. この二つの専門的論考を比較してみると、一般化する事の難しさが分かる。cfr. *American Medical Association; Power, Purpose and Politics in Organized Medicine*, in 《Yale Law Journal》, 63(1954), pp.938-1022. 様々な圧力団体についての優れた研究については次を見よ。David Truman, *The Governmental Process*, New York, Knopf, 1951, passim.
- (124) 次を見よ。Juan J. Linz and Amado de Miguel, *Los empresarios ante el poder publico*, Madrid, Instituto de Estudios Politicos. 本書は出版準備中である。そこで引用された文献も見よ。
- (125) *La sociologia del partito politico*, passim. とりわけ第6部第1「保守主義の道具としての組織」〔イタリア語訳でのタイトル〕を見よ。「目的の転移」という概念は、その後以下のような組織に関する文献で使われている。cfr. Peter M. Blau e W. Richard Scott, *Formal Organization*, San Francisco, Chandler, 1962, pp.229-230; Amitai Etzioni, *Modern Organizations*, Englewood Cliffs, N. J., Prentice Hall, 1964, pp.10-14.
- (126) 開かれた社会における大部分の自発的結社において、また政党においてはメンバーは「足で」投票できるということを多くの著者が強調してきた。組織との一体化が非常に強い場合をのぞいては、実際は多くのメンバーは、自らの考えで目標の実現のために戦うよりは、その組織を脱して新しい組織をつくる方を好むものである。ミヘルスは『政党の社会学』(195頁)でマルクスの独裁者的傾向がインターの危機をまねいたことを非常にうまく描いているが、開かれた社会の自発的結社における過剰なオリガキーの帰結を研究するところまでは進まなかった。その社会ではオリガキー組織は生き延びることが出来るが、メンバーは少ないし、あまり機能しないものである。

- (127) これらの区別を行う必要性については次を見よ。Givanni Sartori, *Democrazia, burocrazia e oligarchia nel partiti*, in 《Rassegna italiana di Sociologia》, I(1960), n. 3, pp.120-123. さらにまた党や労働組合が雇用した職員——たとえフルタイムで給与が支払われているとしても——の増加と、選ばれた指導者の増加とを区別することも大事である。職員は指導者に依存し、指導者は原則としては成員に依存する。さらに、党から給与を支払われた指導者と、地方議会の議員から大臣にまでわたる公的な仕事を受け持つ限りで給与を支払われる指導者とをごっちゃにして考察することも混乱のもとになりうる。「官僚制化」に関する多くの研究は、しばしば、仕事の数とそれを受け持つ人々の数を区別さえせずに、この三つの範疇を混乱している。あげくの果てに実態の全く歪んだ表象をつくり出している。
- (128) *La sociologia del partito politico*, p.502. (邦訳, 425頁)
- (129) Albert O. Hirshman, *Journeys toward Progress*, New York, Doubleday Anchor Books, 1965, ivi. parte II, 《Problem-solving and Reform-mongering》partic. pp.358-384. とりわけ次の節が注目される。《Respectability of the various outcomes and the hankering after simultaneous solutions》, pp.380-384.
- (130) *La sociologia del partito politico*, p.502. (邦訳, 425頁)
- (131) Philip Selznick, *TVA and the Grass Roots*, Berkley, University of California Press, 1953, p.259.
- (132) *La sociologia del partito politico*, p.274 (邦訳, 222頁) ここで引用した主張は、1913年のSPD党大会で一人の代議員が発した意見とつきあわせることが出来る。「もし同志ルクセンブルクが報告を読むだけに止まらず、これらの集会（そこでは不平不満の見解が表明された、と彼女は主張している）にもよく顔を出していたなら、彼女は、これらの「革命的」な集会がしばしば、数千人の党員を擁する地区のうちの百人ほどの男女よりなっているということを知ったことだろう。この集会では、党からはまともに相手にされない少数の無駄口たたきが話をしているのだ。(会場の方から大喝采)」次から引用。G. Roth, *op. cit.*, p.269.
- (133) Giovanni Sartori e altri, *Il Parlamento italiano*, Napoli, Edizioni Scientifiche Italiane, 1963; 《Professionalizzazione e specializzazione》, pp.323-331 e 《partitocrazia ed estrazione di partito》, pp.331-341.
- (134) この問題は *La sociologia del partito politico*, pp.250-251. (邦訳, 198頁) で提出され、ミヘルスはそれを党員に好意的に解決している。
- (135) Robert T. Mckenzie, *British Political Parties: The Distribution of Power within the Conservative and Labour Parties*, New York,

- Frederick, A. Praeger, 1963, pp.645-646.
- (136) *Ibidem*, pp.645-649.
- (137) Henry Valem e Daniel katz, *Political Parties in Norway: A Community Study*, Oslo, Universitetsforlaget, 1963.
- (138) Giovanni Sartori e altri, *Il Parlamento*, cit., pp.105-106. ここには、党規律に関する議員の回答が引用されている。
- (139) J. C. Wahlke, H. Eulau, W. Buchanan, L. C. Ferguson, *The Legislative System: Exploration in Legislative Behavior*, New York, John Wiley, 1962, pp.7-17, 267-286, e passim.
- (140) H. Eulau e John D. Sprague, *Lawyers in Politics*, Indianapolis, Bobbs-Merril, 1964, pp.87-121.
- (141) *La sociologia del partito politico*, pp.485-498, 520. (邦訳, 409-420頁, 440頁)
- (142) 例えば次著で報告されている, 国有化に関する労働党系の労働者の意見の資料(賛成21%, 反対58%, 「分からない」21%, 1960年)を見よ。Mark Abrams & Richard Rose, *Must Labour Lose?*, Harmondworth Penguin, 1960, p.35. 次ぎも見よ。Herbert McClosky, *Consensus and Ideology in American Politics*, in 《American Political Science Review》, LVIII(1964), pp.361-382. この研究は, 1956年の民主党と共和党の全国大会への代議員とその代理の意見を, 合衆国の人口サンプル調査でわかった世論と突き合わせている。
- (143) H. McClosky, *op. cit.*, pp.364-368; Samuel A. Stouffer, *Communism, Conformism and Civil Liberties*, New Youk, Doubleday, 1955.
- (144) この点はG. ロスが強調している。G. Roth, *op. cit.*, p.274.
- (145) William A. Salomone, *L'età giolittiana*, Torino, Silva, 1949; G.サルヴェーミニの書いた序文も見よ。